



〈歌・小説・日本語〉48

# 辞世歌あれこれ

勝又浩

最近の雑誌のなかで思いがけずこんな歌に出会ってちょっと考えてしまった。

風さそふ花よりもなほ我はまた春の名残りをいかにとやせん

これは忠臣蔵事件の張本人、あの浅野内匠頭の辞世の歌だというのだ。えっほんと、であったが、念のため山田風太郎の『人間臨終図巻』（上下、昭和六一、二年。これはわが愛読書、座右の書のだが）を見るとちゃんと出ている。例の松の廊下での刃傷沙汰の後、即日切腹を命じられて、預けられていた田村右京大夫の屋敷の庭で腹を切った。その小半日の間に詠ったことになる。このとき彼は三四歳である。

出典も真偽も分からないが、歌は多くの人が知ることではあったのだろう。

つるところに、見るに耐へない姿が出てくる」（『自殺について』と、唐木順三は断じている。教養として知識を積んだだけの近代のインテリ、学問と人間形成が一体であった伝統が壊れてしまった時代の、インテリ軍人の実態だった、というわけである。

巢鴨刑務所に通った教戒師花山信勝が伝える、処刑前の木村兵太郎中将の言動、「従容として大往生していったと、是非お伝へ願ひたい」と、懸命に頼む哀れな姿も、唐木順三は引用紹介している。これらには、軍人は従容として死を迎えるものであり、辞世歌には執着を棄てて清らかな心境を残すものだという、教科書をなぞってみせるだけの、哀れな人生観しかない。

こうした現象、悲惨な軍人たちの人間模様を、唐木順三は、日本の短歌という文化伝統が生んでいて、許している、という概観のなかで論じている。しかし、その点では彼も戦後の短歌俳句否定時代の空気に押されているなど、今の私には思われる。浅野内匠頭が型

よくできたとは言わないまでも、いかにも辞世歌らしい歌だ。だが、そうであるだけにいつそう、これでいいのかという疑問、皆これを許すのか、受け入れるのかという疑問が起る。だいた

いこの人の短慮短気のために五万石の藩が潰されてしまったのだ。配下に何人の藩士御家人がいたのか知らないが、その家族と合わせて何千人もが路頭に迷ったわけだ。その張本人が「花よりもなほ我は」なんて言ってる場合だろ

うか、と。気になったので、そんな主君の敵討ちをした大石内蔵助の方も確かめてみたが、『人間臨終図巻』には出ていなかった。ただ、最期の首切り役の潮田又之丞に「お先に」と言って笑ってみせたなどと書いてある。それで思いつい

通り辞世歌を詠んだように、東条英機も学習した文化伝統の「猿真似」で辞世歌を詠んだのに違いない。しかし、だからと言って和歌が彼らの人格までつくったわけではない。

ちなみに記しておく、山田風太郎は、思いがけないことだったが、東条英機には同情的で、前記『人間臨終図巻』では、唐木順三が書いていない東条英機の二度の自殺未遂について記して、彼の誠実さを伝えている。しかし、その反動作用なのか、辞世歌については一言も触れていない。『自殺について』が書かれたのは昭和二五年、『人間臨終図巻』は昭和六二年、その三六年の間に、東京裁判そのものへの見方が変わったという事実もある。歴史研究がさ

らに進めば、東条英機への再評価だってあり得ようが、しかし、そうだとしても、辞世歌まで器用に模範解答を提出してしまう彼の知のあり方は、私にはやはり信用ができない。

定家の「紅旗征戎、吾が事に非ず」ではないが、日本の詩歌は古来、政治

て芥川龍之介の小説「或る日の大石内蔵助」を確かめてみれば、「あらたのし思ひははるる身はすつるうきよの月にかかる雲なし」とあった。これも何に依ったのか典拠は分からないが、何だか川柳並みのセンス。そんなものかなあ、である。

私が浅野内匠頭の辞世歌に引っかけたのは、若いとき唐木順三経由で知った東条英機の辞世歌が頭の隅にあつたためかもしれない。

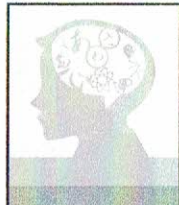
今ははや心にかかる雲もなし心ゆたかに西へぞ急ぐ

これがA級戦犯、日本を誤った戦争に向かわせた張本人の最期のことばなのだ。彼は自分を「極重悪人」「国民から八つ裂きにされてもしかるべきところ」だと語っていたそうだが、そういう反省が直ちにできてしまうこと自体、彼の人間としての欠陥だろう。小林秀雄ではないが、利口な奴ほど簡単に反省するのだ。彼のこうしたありようを、「インテリが、鍛錬を経ないままに古人の猿真似をして、三十一文字をおや

やイデオロギーを排除してきた。歌はもっぱら個人の内面、情感情緒の世界を探り訴えるものとされてきた。それゆえ一藩を潰してしまつた殿様も、歌では決して自分の正統性を訴えたりはしない。そうしてただ、花のように散ってしまふ儚さ口惜しさへの思いを伝えて、あとは察せよと言うばかりなのだ。同様に、一国を滅亡に導いた軍人総理も、歌という場面では外交や戦略への主張は捨てて、個人的な心情を詠ってみせた。これは確かに唐木順三の言うように思想を排除した短歌の弱点であるかもしれない。

しかし、歌はそういうものだとは承知して、そういう歌に現われてしまう自分というものの、自分の内面をひたすら探求し、鍛錬し、磨くことによつて歌を作ろうとした一群の人たちもいた。それが西行であり、明恵であり、一遍であり、良寛であった。そういう人たちには、歌はもっぱら自分の心を、内面を引き出す手段であり、検証する証しであった。





〈歌・小説・日本語〉④  
**辞世歌あれこれ(二)**  
**勝又浩**

つみにゆく道とはかねてき、しか  
 ときのふ今日とは思はざりしを

これは在原業平、厳密には「伊勢物語」の主人公「昔男」の歌だが、辞世歌としてはもっとも著名な一首かもしれない。「終にゆく道とはしれど子規なきつる方にむかふ極楽」(風来山人、子規は冥土の道案内をするという俗説があったそうだ)とか、「つるにゆくみちのこなたのかりの宿/やすみしほどをいそぐたび人」(「新菟玖波集」)等々、業平歌を下敷きにしたりもじつたりした作がたくさんある。

ただし「伊勢物語」には、「むかし、をとこ、わづらひて、心地死ぬべくおほえければ」と詞書のような「物語」があるだけで、これで死んだとも最期の歌であったとも書かれていない。こ

れを辞世歌だと決めつけるのは、かりにも三十六歌仙の一人たる本人には心外であるかも知れない。しかし一方、この歌人は「心あまりて言葉たらず」(紀貫之)の人だという思い込みも人々にはあるから、この、死に臨んで

恰好をつける暇もなかったふうなところが反って業平らしくて面白いわけだ。辞世の歌にさえも巧まざるユーモアがある、などと。

業平が愛される美男の代名詞であり続けるのは、こういう純朴さにあるだろう。貫之の言った「言葉たらず」とは、言い換えれば、この構えのなさ、さばくりのなさのことでもあるだろう。当今は長寿社会だから必然的に死に向かっただけの待機期間も長くなっているが、だからといって死の問題が片付い

て行くわけではない。「きのふ今日とは思はざりしを」という、土壇場の狼狽はこれからもずっと続くことだろう。前回は期せずして「辞世歌」について書くことになったが、書いた後もさまたまなことが浮かびあがってきて、自分でも思いがけなかった。今回はその余滴を少し記してみたい。

まずは三島由紀夫。昨年没後五〇年で話題復活、改めて日本の数少ない国際的な作家であることを示すことになった人だ。

益荒男がたばさむ太刀の鞘鳴りに幾とせ耐へて今日の初霜

何だかケレンミみたつぶり、時代劇でも見るような趣だが、そんなところも含めて三島由紀夫なのだ。何しろ自分の死まで綿密に計画し、演出して見せた人だった。彼の人生には「思はざりしを」などというような事態はなかった、あるいは許さなかったであろう。

彼の辞世歌は他にもあって、前に紹介した山田風太郎『人間臨終図巻』は、散るをいとう世にも人にもさきか

けて散るこそ花と吹く小夜嵐  
 を引いている。東条英機の辞世歌に「心にかかる」と「心ゆたかに」と語の重出があつて、作者が縛られているものが見えるようであつたが、ここでの三島由紀夫も「散る」を重ねている。無理にも自身に言い聞かせるようなところもあつたのだろうと、痛々しいものさへ感じてしまう。

今日もまた胸に痛みあり。

死ぬならば、

ふるさとに行きて死なむと思ふ。

これは石川啄木。先の業平の急な苦しみはどんな病だったのか分からないが、こちら啄木は言うまでもなく肺結核。死の一月ほど前まで書き続けられた日記には一家のすさまじい極貧ぶりが克明に記されていて、読む方も胸が痛い。そうしたなかで「死ぬならば、ふるさとに行きて」と詠った人はまだ二七歳。退学したり喧嘩したり「石をもて追わる」ごとくであつたはずなのに、である。唐突かもしれないが、「願はくは花の下にて春死なん」(西行)

と歌った人のことなどを思い出すと、彼はまだ自分の新しい「ふるさと」を築くところまで行けなかつたのだとみえる。そして、この浜民村トラディショナルが、良くも悪くも結局は啄木なのだ、あまり故郷意識などない私には思われる。

死ぬならば真夏の波止場あおむけにわが血怒涛となりゆく空に

(寺山修司)

啄木を踏まえたいうでの一首なのだろう。寺山修司は若いときネフロゼ治療のためにした輸血から肝硬変になり苦しんだが、最後には敗血症で死んだという。最後のエッセイになった「墓場まで何マイル?」には、「私は肝硬変で死ぬだろう。そのことだけははっきりしている」と書いている。まさに血への怨み、血との闘いが、彼のもう一つの人生だったわけだ。

生きも死にも天のまにまにと平らけく思ひたりしは常のときなり

(長塚節)

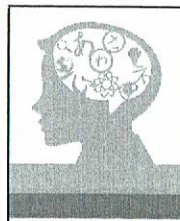
これは初めに引いた業平歌と通ずる

ところもあると思うがどうだろうか。構えたもの、人工的なものはイヤ、万事自然体が一番、などと思つている、言っている私には心しておかなければならぬ一首だ。良寛和尚のように、「死ぬときは死ぬがよろしかろう」と言えるような境地には、幾つになつてもなかなか成れないのが現実だろう。

長塚節は『土』を書き終えたころ、喉頭結核の診断が下つて、余命はあと一年程度だと宣告された。三二歳だったが、そのとき詠んだ歌だという。しかしこのあと彼は五年生きて、その間、関西から九州と、よく旅行をし続けて、とうとう福岡で死んでいる。旅を好きな人であつたから、それも本望であつたかもしれない。

今回は、辞世歌というものが格別な読みを迫り、独特な味わいを持つものだという事実を知ることになった。きりがないからこれで打ち切りとするが、「辞世歌・辞世句全集」というようなものがあつたら傍に置きたいものだと思つた。





〈歌・小説・日本語〉50  
与謝野晶子雑談

勝又浩

なにとなく君に待たるるここちし  
て出でし花野の夕月夜かな

「みだれ髪」中の一首だが、私の好きな歌の一つで、これまでも何度か書いています。まず情景がよいが、さらにこの歌の作者の年齢を想像すると面白いからだ。むろん「みだれ髪」では作者は当然二一、二歳の女性であるが、この歌をたとえば老人ホーム発行の歌集のなかに置いてみればたちまち様相を変えてしまう。「君」は最近死別した連れ合いのことだろうし、「花野の夕月」も春から秋に引越すかもしれない。というわけで、ここから世界一短い詩たる短歌俳句の曖昧性、しかしそこから生まれる解釈の自由な広がり、言い換えると読者参加が生まれ、そこか

ら更に連歌連句のような共同制作の文学が生まれてくる、というような議論をしてきたわけだ。

話が変わるが、最近、初めて会った知人の小学四年生になるお嬢ちゃんに名前を訊ねたら「花野」だと返ってきたびっくり。で、いい名前だね、誰が付けたの、お母さん、ということになって、その若いお母さんに確かめたら、単に自分の思い付きで付けただけ、与謝野晶子の名は聴いたことがあるかな、というので二度びっくり。それで、こういう歌があるのだと教えてあげたが、むろん余計な解釈はなしで。雑談になったが、こんなことを思い出したのは、先日神戸に住む晶子研究の友人から珍しく電話があつて長話をしたからだ。ご多分に漏れず彼も

窮して評判になり、私も野次馬的に覗いたのだ。もうすっかり忘れていたが、探し出して読み返してみると、やっぱり面白い。まず有島武郎の短歌が引用されていて、これも、あれ、と思つた一つだった。

浜坂の速き砂丘の中にして寂しき  
我を見出たるかな

いづこへていづこへ行くか雨の脚の聞え聞えず夜をこもるかな  
大正一二年五月、山陰への講演旅行の途次、葉書に書いて晶子に送られた歌だ。有島武郎はこの六月九日には死んでいるから、これが晶子への最後の便りとなった。晶子を尊敬し、「まだ持ったことのない姉」とも呼んだ彼は、もう死の覚悟もしているなかで、むしろ短かい歌によって万感の思いを伝えることを択んだのだろう。一方、晶子は「或る女」に感動して有島に手紙を書いたところから文通が始まる。家も近かつたところから有島家にも通い、その人柄に惚れ込んでいったらしい。「今の日本に武郎氏ほど

偉大な人格者をしらす候」と友人への手紙に書いている。この敬愛がだんだん敬慕に膨らんでいったようだ。直接、手渡しするような手紙が増えてゆく。ちなみに二人は同年生まれだった。

新しき愁かあるは漸くに今知る恋のよろこびか是れ  
目に見えぬ過ちごとを思ふ時若や  
かなりと人のほめ行く

こんなふうには晶子の歌は目に見えて輝いて行くことになる。晶子の生活、情感は全てというほど歌になり、それは毎月「明星」など雑誌に発表されるから、事情を知る人には歌と現実との関係も読めることになる。有島武郎も「御歌のなかに私もよみこまれる一人になることは、待ち設けてはならないと思つたところのものでした」と、喜びを手渡しの手紙に書いている。

しかしここまで来ると晶子には当然、夫・寛の存在も、それまでとは違った性格をもつことになるだろう。みずからの恋の消ゆるをあやしまぬ君は御空の夕雲男

コロナ籠りで暇になったものと見える。このときも晶子のパリ滞在時のアパートのことや、そこから晶子の秘められた恋の話などになった。

パリのアパートというのは、これまで長いこと誤った家が想定されてきたのだが、最近、菊地英之が正確な場所を突き止め、写真付きで紹介した（『日本文学誌要』10号、令和二年三月）というニュースである。誤りは、もともとはパリの住居標示法を知らなかった寛の誤記から始まったのだが、パリに二〇年住む菊地英之がそれに気づき、正しい場所、アパートを探し当てた。行ってみると、まるでそれを百年待っていたかのように改装工事の最中で、部屋の中まで入ることができ、写真も許されたのだ。

その与謝野夫妻のパリ滞在についてはひとくさりの話もあるが、先日はそこから永畑道子「夢のかげ橋」（昭和六〇年、新評論）のことになった。三五年も前の本だが、晶子と有島武郎の秘められた熱い交情を二人の書簡から追

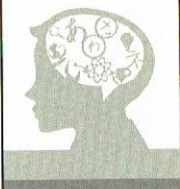
うす白く青く冷たき匂ひする二人  
が中の恋の鋪かな  
「恋の鋪」とはよくぞ言つたりだが、この前には、寛の女性関係にさんざん泣かされた晶子が、先ずあつたのだ。

しかし寛が、こうした晶子の変貌に気づかないということもない。「夢のかげ橋」は寛のこんな一首を引いている。  
二十歳より今も空行くこの人は  
翅に代えて夢を伴ふ

輝いてゆく晶子を見ながら、しかし彼女が今は一〇人の子供たちを抱えて、かつて自分のところへ飛んできたようには飛び去ることのないのも、寛には分かつていたのだ。だが、そうであればもう一つ、寛のこうした歌も当然、晶子は見えていたわけで、そこには歌人夫婦の不思議な関係、奇妙な馴れ合いも見えるのではないだろうか。

君亡くて悲しと云ふをすこし超え  
苦しと云はば人怪しまむ  
有島武郎は有島の婦人記者と心中死する。その新たな悲しみから更に晶子のいい歌がたくさん生まれている。





〈歌・小説・日本語〉⑤

# 歌の国、日本

勝又浩

「辞世歌あれこれ(二)」(五月号)のお終いに、「辞世歌・辞世句全集」というようなものがあつたら傍らに置きたいものだと思つたら、友人が早速調べてくれて、アマゾンにこれだけ出ていたよと、A4にして三枚のリストを送ってくれた。まず、その量に驚いたが、それは「億人のための辞世の句」から始まって、「辞世千人一首」「辞世名鑑」「辞世の言葉で知る日本史人物事典」等々といった具合だ。そうして最後には「辞世の言葉卓上カレンダー」から歴史上の人物の辞世のことは刷り込んだ壁掛けからトートバッグまで、つまり辞世グッズまで揃っている。まったくヘンな国だなあ、であるが、しかし、金子兜太編『元氣なうちの辞世の句三〇〇選』などとあれば、やっぱり

覗いて見たくなるではないか。たしかに、辞世の歌・句などは、むしろ元氣だからこそ考えるのかもしれない。こんなリストを見ながらいろいろ思うことがあつたが、その一つは、迂闊なことは言えないな、という反省である。辞世歌(句)全集があつたら座右に備えたい等と書いたときは、誰々の、というのならともかく、辞世歌一般などに興味を持つ人はあまりないだろう。かなりのつもりでいたのだが、それはとんだ認識不足だったわけだ。「全集」こそなかったが、それはむしろ有りすぎて実現不可能だということであるだろう。そしてこんな事実からでも分かるのは、日本はやっぱ真底から歌(句)の国なのだという事実である。辞世歌(句)がこれほど存在し、誰も関心

問答」(石波新書)くらいであつたが、この一冊でも彼の定評の、桁の違った博学ぶりには驚かされる。そうした性格が、この『うたかたの国』では特に顕著だ。この本は「Saigow Remix」ともされていて、四〇〇ページを超える本文は全て著者のこれまでの著書二二三冊からの抜粋なのだ。珍しい形態の本だが、言うならば縮約版松岡正剛日本文化論集である。

引かれている文章はどれも長くても二ページ程度、半ページから数行の文がほとんどだが、その大量の断片がテーマに沿って分類整理されている。そのテーマは音・声・ことば・言葉・文字・文字霊・書・五十音図・花・景色・旅・物狂い・声明・今様・念仏・浄瑠璃・三味線・門付け、むろん茶道華道禪と浄土と無常と能と歌舞伎と国学と等々、ここにはとうていあげきれない。要するに日本文化のあらゆる方面だと言うしかない。そして、こうしたなかには、たとえば、隆達節を創始した「堺の高三隆達」というシンガーソングライ

ター」は「調べてみると、高三家は代々法華宗だった」などというくだりもあるのだから敵わない。

こんなふうに登場する人名はアマテラスや稗田阿礼から始まって「AKB」や「モーニング娘」に及ぶし、あげられた書名作品名は「詩経」から始まって童謡「雨降りお月さん」にも至る。これらの索引がごく小さな活字でも八ページを占めている。こういうレベル、こういう視野、こういう密度から、つまりは、日本文化がいかに短歌俳句を中心にも基盤にもしてでき上っているか、「花鳥風月」がいかに日本文化の基本的な「マルチメディア・システム」であったかと論じ、証してみせている。まことに日本は、日本文化は歌の心で出来ているわけだ。

付け足しておく、途中にはこれらと少し趣を変えた、これだけは独立した、「百月一首」なる一章がある。月を詠った万葉から古今はもとより西行明恵道元良寛から芭蕉蕪村宣長の他に「おもしろ」まで、近代に入っては白秋

を集めているのは、それほど日本人は短歌俳句に親しんでいるのであり、逆に言うと、短歌俳句が浸透しているからこそ、辞世の歌(句)も人々の日常のなかにあるのだろう。

世界中で日本人ほど日記をつける国民はいないとドナルド・キーンが指摘している、その理由を私流に考えたことがあつた。それはもう一つの日本の民族文学である「私小説」とも深く関わっているのだが、その日記好きと、歌(句)の伝統とは、これも一つの根から出ている二つの文化の花なのだ。

ところで、迂闊なことは言えないなと、日本は歌の国なのだという二つの思いは、最近、松岡正剛「うたかたの国」(令和三年、工作舎)を読んだの感想でもあつた。この本の副題は「日本は歌でできている」である。覗いて見ないわけにはいかないではないか。

松岡正剛の名はもとよりとつくから承知していたが、実は名前ばかりで、そのわりには読んでいなかった。私の見ているのは田中優子との対談「日本

から山頭火、中也冬衛の詩、寺山から福島泰樹まで、いわば詠月文学コレクションののだが、この徹底ぶり、こんなところに、良くも悪くも言つておこう、松岡正剛の仕事の真骨頂が見えるだろう。

松岡正剛にはいつも「編集工学研究所所長」、「イシス編集学校校長」という肩書が付いている。私にはこれらの仕事の具体的なことは分からないが、ただ、彼が「編集」ということを、言うならば一つの思想として扱っていることは私にも理解できる。一般に編集者とは文化の工作者なのだが、そういう観点からすると、実は文化そのものも積み重ねられた編集行為であり、その結果なのだ。この本にも、「紀貫之こそが日本で最初の最大のジャパニーズ・エディターだった」ということが引かれているが、あの、女装して書かれた『土佐日記』、男の文化であった日記と、女の文化であった仮名文字を解く命題として、新しい日記文学を生み出したのが紀貫之だ、というわけである。







〈歌・小説・日本語〉52

# 歌の国、日本(二) 勝又浩

今回は松岡正剛の「花鳥風月」は日本の「マルチメディア・システム」だということばを紹介した。つまり日本の文化は花鳥風月、雪月花を尺度とも

体系ともしているという意味だ。まことに、日本では料理だって松竹梅で、AコースBコースなどと無粋な言い方はしない。この、天井や天ぶらの大小上下まで松竹梅と呼び分けるような日本の文化、また感性はいったい何処から来て何であるのか、ということになるが、これも松岡正剛に従えば、「日本は歌でできている」からだということになるだろう。歌は、上は天皇から下は一兵卒にいたるまで、行き渡った日本人の生活の一部なのだ。先には日本人の辞世歌(句)好きについて言ったが、こうして日本人は食べるにも松竹

梅、飲むにも雪月花、歌うのはもちろん、死ぬにも花鳥風月なのだ。

そこで今回はこんな本、「日本人はなぜ、五七五七七の歌を愛してきたのか」(錦仁編、平成二八年、笠間書院)で知った話題を少し紹介してみたい。歌がいかに日本人の生活と文化の多方面にわたって浸透しているかを検証した一冊である。と言っても、実はこの本、タイトルを見て短歌の音数律のことを論じているのだと思っただが、開いてみれば全然違って、歌枕のことや作歌作法のことまであつて思惑が外れた。それで放置してあつたのだが、先の松岡正剛を読んで改めて思い出した次第。分かつてみればこれも「日本は歌でできている」事実を検証した一冊だった。しかし、ついでだから蛇足しておく、

そうと分かれればいっそう、このタイトルは旨くない。内容はあくまでも、なぜ歌を愛してきたか、ではなく、日本人はかく歌を愛してきた、なのだから。たとえば本書の第三章は「和歌の広がり」をどう見ていくのか」とあつて、そこには「画像」「庭園」「古い」「景観」「飲食」と、五つの項目があげられている。一、二紹介すれば、まず、ここの画像とは、江戸時代の「古今相伝深秘」なる書物に載る「いなおほせどり」の図のことである。しかし、こう言つても、大方の人には何のことか分からないであろう。要するに、いわゆる「古今相伝」の問題なのだ。まず始まりは「古今和歌集」の次の一首。

わがかどにいなおほせどりなくな  
べにけさ吹く風にかりはきにけり  
ここに詠われた「いなおほせどり」が昔から正体の分からない「鳥」で、諸説あるのだそうだが、その隠された正解を掴までつけて解説しているのが、「古今相伝深秘」なのだ。本書の「和歌をめぐる画像」密教化する秘説の視

覚性」(松本郁代)は、その図の意味を多角的に考察している。ちなみに付け加えておくと、『古今集』には他に「百千鳥」「呼子鳥」がやはり実態の分からない鳥、また植物では「をがたまの木」「めどの木」「けづり花」「かはな草」が同様に実態不明で、これらを合わせて「三鳥」と「三木一草」の意味が、つまり家々の「秘伝」として伝わり、こんなことが、いわゆる「古今相伝」の内容なのだ。「秘伝」とされるくらいだからいろいろ神秘めかした故事謂れが縷々語られているが、それらは要するに仏教での灌頂の儀礼を模しているのだという。

語を「いなおほせどり」に戻せば、これは、結論を言えば「鶴鶴」のことなのだ。ただ、鶴鶴と言えば、『古事記』ではイザナミ・イザナギの尊たちに「みとのまぐい」を教えた鳥であるから、それはもろもろの生産の始まりでもある。それで稲種を負わせた鳥だということになって、結局は鳥の姿をした神様の姿が描かるわけだ。面白いといえ

ば面白いが、また、ばかばかしいと言えはそれまでもある。ただ、こうした手の込んだ作り話が生まれてきたり、それが何世代にもわたって大真面目に伝えられて来た背景には、歌やことばそのものについての強い信仰のようなものがあつたからであろう。意味の分からないことばや歌が、そのまま存在自体の神秘の象徴として、記号として働いたのだ。

歌やことばのこうした働きの、別の例が「古い」であるだろう。ここでは、「神が降りる、神と遊ぶ」歌占の世界(平野多恵)がその間の事情をよく解説している。『新古今集』の「神祇部」には日吉、住吉、熊野等々、一三もの神社、神々の「託宣歌」が収載されているが、それらがみな「歌」の形を取っているのは意味が大きい。日本の神々はみな大和歌で神意を伝えるわけだ。もっとも「御神籤」になると中国伝来の仏教系、漢詩系のものもあるが、いまそれは措くことにしよう。歌と文化ということでもう一つ触れ

ておけば「庭園」のことがある。ここでは「六義園から歌を見る」日本文化の力(島内景二)がそれらを解き明かしているいろいろ教わるが多かった。駒込の六義園は私も好きな庭園の一つでよく行く。それでここが柳澤吉保によつて造られたことや、名前の「六義」が『詩経』から、またそれを大和歌に応用した『古今集』の「仮名序」からとられているとは何となく承知していたが、事実はそんなノンキなものではなかった。庭園はその山も池も橋も、流れも植栽も置石も、すべては名前をもち意味をもつのだ。「六義園八十八境」というのだそうだが、「境」つまり「景」を超えた意味があつて、それは日本、中国、天竺の文化、神道と儒学と禅とを「歌」で融合調和させた、結局は「和歌の庭園」なのだと言ふ。強調すれば、桂離宮は月を見るために造られた庭園だが、六義園は月の文芸文化を思い出させるための庭園なのだろう。ここでも、「日本は、日本文化は歌でできている」のだ。





〈歌・小説・日本語〉⑤  
歌の国、日本(三)

勝又浩

駒込の六義園がさまざまな趣向の見立てを凝らした「和歌の庭園」になっていることを前回紹介したが、こうした発想の元祖的存在は、庭園ではないが、後鳥羽院の建てた「最勝四天王院」ではないだろうか。前記『日本人はなぜ、五七五七七の歌を愛してきたのか』(平成二八年、笠間書院)にも詳しく紹介されているし、当然、松岡正剛『うたかたの国』(令和三年、工作舎)でも何度も言及されていた。「最勝四天王院」は現在ではその場所さえ推定で言われるほど跡形もなくなってしまうが、面白いことに、この仕事を手伝わされた藤原定家の『明月記』にその内容が詳細に記録されることになった。それによれば「最勝四天王院」とはこんなものである。

それは、形式的には一つの寺院であるが、またそういう形式の別荘でもあって、その私的な部分を歌の部屋にしたのである。各部屋を、大和から始まって摂津、紀伊、播磨、西国、山城に戻って東は伊勢、尾張、武蔵から陸奥まで、八つの地域に配分、その部屋の襖に四人の絵師を動員して各地の歌枕、つまり名所を描かせる。この、絵にすべき名所とそれを詠み込んだ歌の制作選択のためにも四人の歌人たちが選ばれたが、その一人が定家だったわけだ。結局、定家の案が採用されたが、それは、西は天橋立から東は塩竈浦まで、合わせて四六種である。渡邊裕美子の解説(前記『日本人はなぜ、五七五七七の歌を愛してきたのか』)によれば、定家は「他の者はお利口さんだから何

も言わない」と、『明月記』に書き込んでいるという。歌に關しては天皇にも意見を言った定家らしいことだ。

後鳥羽院も定家も「新古今和歌集」編纂の中心人物だから全国の名所短歌四、五〇首を選ぶことなど雑作もないことだと思われたが、どうしてどうしてそんな簡単なものでないことは歌を見て行くと直に理解できる。部屋ごとに地域が分けられたばかりではなく、分けられた四間あるいは五間、六間の襖はさらに山、川、野、浜、浦を揃え、しかもそれら全ては四季、春夏秋冬の配置を持たなければならぬのだから大変だ。古歌からの選択だけでなく新作も含むとした意味もそこにあつたのだろう。やっぱり定家くらいの人でなければとうてい務まらない仕事だったわけだ。私は、歌ではないが広重の絵、東海道五十三次のことを連想したが、あれは土地風景の移動と季節循環の関係はどうなっていただろうか。

柳澤吉保と北村季吟の合作であつた「和歌の庭園」六義園は五代將軍綱吉

もお気に入り度々下向したというが、京都白川の「最勝四天王院障子和歌」は後鳥羽院が自分で作ったものだった。いわば帝王のお遊びなのだが、その帝王が後には鎌倉幕府打倒のために戦まで起こした人だと考えると、このお遊びの意味もなかなか複雑である。この帝王は政治権力だけでなく文化、歌においても、全国を体系化し、支配しておきたい願望が強かつたのだらうと見えるからだ。そういう人が、後には隠岐の島に配流されるという結末はいかにも皮肉な、あるいは相応しい成り行きであつたのかも知れない。

ところで、私はまだ、松岡正剛の言つた「日本は歌でできている」、花鳥風月は日本の「マルチメディア・システム」だということばをめぐって考えている。日本では家屋の部屋も花鳥風月雪月花で名付けるが、さらに歌は風雅の遊びであるだけでなく、ときに神意を伝える手段であつたりする。まことに日本文化は基本的に、全体的に歌で、花鳥風月できているのだが、そうだ

と知れば知るほど、では、何故そうなのか、という疑問が大きくなる。それはおそらく歌以前、歌自体が既にそこから生まれてきた、もう一つ奥にある日本の性格から来ているのではないだろうか。少なくとも、日本国民の間に歌が浸透していたから、その結果、花鳥風月が日本のマルチメディア・システムになつた、というような単純なものではないであらう。

思うに、後鳥羽院も、彼が歌好きだったから、自分の別荘を歌で飾つたというだけではなかつたであらう。私的な空間を花鳥風月、雪月花で飾ることが、彼にとつては自分の存在感であり、充足であつたのに違いない。歌はその一番手っ取り早い手段だったのだ。

高浜虚子は、俳句は「花鳥諷詠」だと言つたが、その事情は歌も同じだろう。歌の「主成分」はやはり「景と情」なのだ。日本の詩が景と情であるとは、見方を変えれば、日本の詩の大前提に日本人の自然への信頼・信仰があるということだろう。温暖な気候風土

がそうさせたのか、変化のある四季の移ろいに囲まれて生き重ねてきた結果そうなつたのか、いずれにせよ日本人の原感情には自然への信頼感、融和感があつて、それらを吐き出し、紡ぎ出すのが日本の詩、歌なのだ。

旅ごろも木の根かやの根いづくに  
か身の捨てられぬ処あるべき

(一遍)

こんなことを考えていると必ず出てくる、私の好きな一首だ。一遍上人は念仏を称えながら「南無阿弥陀仏決定往生六十万人」のお札を配つて諸国を巡り歩いた人だが、その「旅」のなかでの一首である。自然への信頼がそのまま存在の究極への信頼、つまり信仰となつているのだ。こうした自然への絶対信頼、一体感こそが日本の信仰の源泉、そして詩の源泉であるだろう。帝王の遊び、後鳥羽院が描かせた四六枚の景色、四六首の歌も、間違ひなく、日本人のこうした自然信仰のなかにあつたらう。